

英知通信

昭和49年12月15日

英知大学

No.11

英知大学後援会創設さる

四月以来ご父兄有志各位が度々
 会合され英知大学を心より援助
 するために強力な後援会が創設
 されましたので、その趣意書よ
 り趣旨を抜粋しあわせて役員の
 ご芳名を掲載します。



山口満雄 会長

趣旨

私共の子供がお世話になっており
 ます英知大学は、皆さまご承知のよ
 うに本年創立第十一周年を迎え、関
 西におけるカトリック系の大学とし
 て独自の発展をとげております。昨
 年秋以来の世界的インフレの中で私
 学の経営は非常に困難に直面し、本
 年十月よりの諸物価の高騰は更に私
 学の経営を圧迫するものと伺ってお
 りますが、英知大学は学長先生は、じ
 め大勢の内外人カトリックの宗教関
 係者の奉仕的努力により他の大学よ
 りも比較的に低い学費で殊に上級学
 年は非常に低い学費で、しかも立派
 な教育に努力され私共父兄はいつも
 感謝している所でございます。

私共はこれからいささかなりとも
 英知大学の研究及び教育に協力申し
 上げたいと存じ、岸学長先生ともご
 相談の上、有志の父兄が度々会合を

重ね本年七月二十七日、英知大学後
 援会設立発起人会を開催、全員の賛
 同をもって会則及び役員を決定、後
 援会を設立いたしました。後援会の
 目的は会則にもございますように、
 大学の教育研究・環境改善への助成
 ・教員研究費の助成・学生の経済援
 助・学生の厚生保健の助成等と共に
 会員の親睦でございます。

つきましては在学生のご父兄各位
 におかれましては、大学を助け、よ
 り充実した教育をして頂けるよう協
 力いたしてまいりたいと存じます。

役員会としてはぜひとも全員のご入
 会を希望いたしております。来年度
 昭和五十年よりの入学生のご父兄は
 自動的にご入会頂くことになってお
 ります。

* *

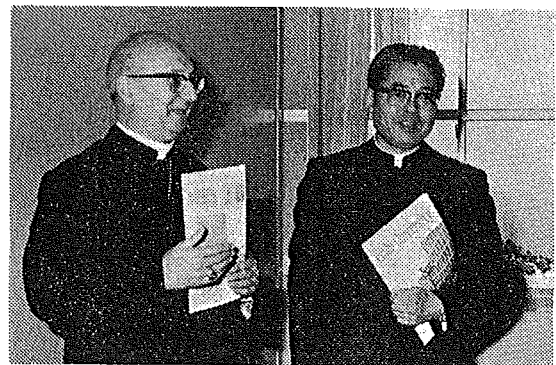
役員ご芳名

会長	山口満雄
副会長	林敏男
同	山岸陸雄
同	辻中義春
同	本多三郎
同	松井良太郎
同	七浦保次
同	吉中清人
同	淡野初子
同	的場啓子
同	森山拓蔵
同	箭内章
同	中畑孝
同	監査

(敬称は省略します)

バチカン大使ロトリ大司教

本学公式訪問



去る一月十日着
 任した新任の駐日
 バチカン大使イボ
 リト・ロトリ大司
 教は、本学を公式
 に訪問された。

五月二十八日、
 午前十一時、ロト
 リ大司教は、本学
 創立者・初代学長
 田口芳五郎枢機卿
 とともに本学に到
 着、岸英司学長や
 教職員、学生の代
 表者たちの出迎え
 を受けたのち、構
 内を巡回し、体育館前において公式
 訪問記念として楠の木一本を植樹し
 た。その後隣の百合学院へ行き、生
 徒たちの歓迎を受けた。

ロトリ大司教は、一九一四年、ロ
 トリ大司教は、一九一四年、ロ

ーマで生まれ、
 一九三七年司祭
 に叙階され、一
 九四六年にバチ
 カン外交団に加
 わった。神学博
 士、教会法学博
 士、教皇庁立ロ
 ーマ神学院教授
 の経歴をもつか
 たわら、国務省
 を振り出しに、
 コロンビア、ペ
 ルー・オースト
 ラリア、ポルト
 ガル各国大使館

「二十世紀へのカオス」

を統一テーマに

― 第十一回 英知祭の催し ―

第十一回英知大学祭は、十月三十
 日より十一月四日までの六日間、実
 行委員長泉啓太君(仏三)の指揮す
 る委員会のメンバーを中心として、
 全学一体のムードのなかで催され
 た。統一テーマとしては、「二十一
 世紀へのカオス」という、現代的な
 終末思想を反映したかのごとき、一
 見奇妙な表現であったが、今年は何
 年になく、正面玄関の装飾をはじめ
 アーケードなどに斬新な趣向が見ら

れ、きわめて印象的であった。
 三十日午後からは、雨のなかを学
 生たちが神戸元町を田吾作行進
 し、氣勢をあげた。三十一日は、大
 学の行事として午後二時より、新し
 く造られた噴水「英知の泉」の祝別
 式があり、その後英語劇やイスパニ
 ア語劇が公演され、日頃の成果をし
 ゅうぶん発揮した。十一月一日は創
 立記念日で岸学長らの司式でミサが
 捧げられ、戸田助教が講演をし
 た。二日はフォーク演奏、のど自慢
 大会、三日はホーム・カミング・デ
 イ、四日はクラス対抗大合戦など多
 彩な行事が繰りひろげられた。

成功裡に終わった第二回 ヨーロッパ英語研修旅行

二十六日間、四十四名参加

本学主催第二回ヨーロッパ英語研修旅行は、去る七月二十五日より八月十九日までの二十六日間、英国の西南トキーでのセミナーを中心に行われ、参加者全員四十四名は語学の修得を深め、見聞を広めるなど、

メルオー教授

バルマ・アカデミック賞受賞



本学フランス文学科のジャン・ジュルメメルオー

教授は、去る九月二十六日、フランス文部省よりヤコボエウイチ総領事の手を経てバルマ・アカデミック賞を授かった。

これは、メルオー教授が長年にわたる音楽教育を通じ文化の発展と人材の育成に努めた功績をフランス文部省が認めたことによるものであって、東京におけるフランス大使館やパリにおける二年間におよぶ厳密な調査にもとづいてフランスの総理大臣が決定したものである。

メルオー教授は受賞の朗報に接して、つぎのように感想を述べた。

「このたびの受賞を本当にうれしく存じております。パリにおいて日本人たちが能く歌舞伎を紹介しフランス人に啓蒙を与えたことよって、フランス文部省からアカデミック賞を授かったことがありますが、フ

きわめて有意義な日程を送った。团长には、昭和四十七年の夏、第一回研修旅行に团长を勤めた学長広報室長井上博助助教授が選ばれた。また添乗員としては、近畿ツーリストの宇野哲史氏が昨年度フランス語研修旅行の経験を生かして旅行の企画と世話にあたり、本学卒業生上田喜昭氏（城星高校教員）が副团长として一行のためによく尽力した。

フランス自身が母国の政府から授かることはそんなに簡単ではありませんが、私に与えられた名誉が教鞭をとっている本学のために名譽になることであれば、私のよろこびはひとしお大きなものであります。郷里パリで年をとった私の母が何よりも私のために喜んでくれていると信じてやみません。」と。

ちなみにメルオー教授はパリにて大正十四年に生まれ、昭和十九年ソルボンヌ大学で大学入学資格認定試験に合格、同年九月パリ・ミッシェン神学大学に入学、昭和二十四年五月カトリック司祭に叙階し六月同大学卒業。また同大学在学中パリ・グレゴリアン音楽院に入学、昭和二十四年六月教会音楽修士号を受けた。メルオー教授は同年十一月渡日、それより二十五年間、日本各地において音楽の教師たちに専門的な教育をほどこすとともに、コーラスの指揮をとり、オルガニストとして活躍しまた作曲を続けてきた。英知大学でも同教授の作曲によるものであることは周知の通りである。メルオー教授の公演会はずでに百回を越え、また音楽や芸術哲学に関する論文や記事は四十以上にのぼっている。

一行は、七月二十五日、午後九時四十五分羽田空港より北極まわりの英国航空のジャンボ・ジェット機にてロンドンへ向かって出発、翌二十日六日現地時刻の午前六時十五分、目的地に無事到着。ロンドンにて二日間を観光に費やしたのち、七月二十八日午前八時半特別バスにてデボンシャーのトキーへ向かった。翌二十九日より八月九日までの二週間、学生たちは各自英国人の家庭に寄宿しながら英語セミナーに通い、英国人の指導のもとで生きた英語を修得した。

研修後の八月十日よりは観光旅行に移り、パリ、ジュネーブ、ミラノ、ローマなどを歴訪、八月十七日午後二時南まわりの英国航空機で帰国の途についた。途中香港で一泊し、八月十九日午後二時、二十六日より故国の土を踏んだ。

イギリスで学んだこと

堀越美保子
(英文学三回生)

ポスターや雑誌などについているヨーロッパの写真を見てみると、以前はなにか遠い別世界のように感じた情景が、懐しさや親しみと、さらに新しい興味をもって私の目を捕える。ただ地図の上だけの世界、本の上だけで学んだ人々の風俗、習慣が、今は立体的に貴重な経験を通して、頭の中で再構成される思いだ。

七月二十五日、我々研修旅行の一行は、羽田を飛び立ち、イギリスで約二週間の学校生活を体験した後、フランス、スイス、イタリアのコースを取り、楽しい思い出に胸をふくらませて帰路についた。一こま一こまの思い出が、今では断片的になってしまったが、はつきりと脳裏に焼

きつけられていて、折にふれてふとああ、こんな時に、と記憶の中よみがえってくる。なんといつても、クライマックスは、イギリスでホームステイをし、いろいろな人々とふれ合いながら通った学校生活で、イギリス人と日常生活を共に送ること、なにか自分も一分子としてその中にとけこんでいるのだ、という充実感と、新しく広げられた世界を許容することによって、視野が広められたような満足感を感じざるを得なかった。

我々の二週間の学校生活が開かれた町、トキーは、ロンドンから南に汽車で約三時間ほど行った所の緑の多い、小さな、快い町であった。各国から実際の生きた英語を学ぼうと集まってくる若者で、町はかなり国際色豊かであった。

一緒に授業を受け、いろいろな問題について討論し合ったドイツ人。お昼に、笑顔で比較的安くおいしい食事を提供してくれたレストランのおじさん。学校の帰りに、いつもとちがったバスに乗り込んで迷子になった時、私の教科書や荷物を自転車についで、一緒に家を探して歩いてくれた親切な男の子たち。キャバレーでいい声で歌を聞かせてくれた、ロンドンなまりの強い、気のいい歌手のマイク。重そうにしているおばさんの荷物を助けてあげたら、何度か何度もお礼を言ってお茶とケーキを御馳走してくれた太ったおばさん。いろいろなことを親切に教えてくれ、いつもあの百万ドルの笑顔で注いでくれたやさしく、ハンサムなクーパー先生。厳しかった講読の先生。毎日、美しいサンドイッチをお

昼のお弁当につくってくれ、台所でお手伝いをするといろいろな歌を覚えてくれたホームステイのお母さん。いたずらだったけれど学校だけでは学べないことを教えてくれたアンジェラとクリストファー。などなど、まだまだあげていけばきりのないほど、実に様々な人間像にふれ、様々なことをそこから教わった。それは時には、国際的な視野から見た日本人というものを考えさせられ、反省を促されたこともあったし、また、日本人独特のよさを知らされて誇りを感じたこともあった。びつくりさせられることも、言語的な問題から誤解が生じたこともあったが、一つ一つが勉強であり、一つ一つが視野を広めてくれる貴重な体験であった。国家間の偏見なしに、いろいろな人々の好意や善意にふれる時、一国だけの利益を追うことなく、国際的な視野で物事に目を向ける時、どうして戦争などという概念が浮かんでくるのだろうか。私がトキーの町で味わったこの感覚を、全世界の人々に味あわせてあげたい。単純であまりにも素朴すぎるかもしれないが、この感覚こそ、戦略だ、陰謀だと騒がれている今日の世界状況に必要な感情ではないだろうか。つくづく感じさせられるこのごろである。ホームステイの居間で、お茶を飲みながら、皆が一つになって家族団らんを味わったあの気分。公園で輪を作って討論をしたあの広い心のゆとりと真剣さ。平和な世界を一つに結びぎざぎざは、さっとこうした個人個人の小さな素朴な体験から広がっていくのではないだろうか。私のイギリスでの貴重な体験である。

ラス・カサスと私

染田秀藤

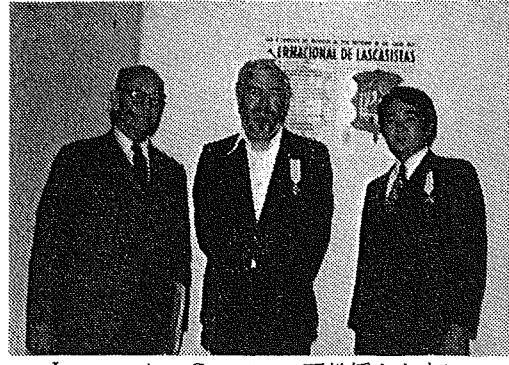
イスパニア文学科講師

今からちょうど五百年前の一四七

四年の八月にイスパニアの南、アンダルシアのセビーリヤという町で一人の男子が誕生、バルトロメー・デ・ラス・カサスと名付けられた。大きく育ったラス・カサスはサラマンカ大学で法律を学び、その後一五〇二年に当時インディアスと呼ばれていた新世界へ渡った。植民者ラス・カサスはイスパニア人達のインディオに対する虐待、苛斂誅求ぶりを具に目撃した。その結果一五一四年、ラス・カサスは所有していたインディオ達を釈放し、爾来一五六六年に帰天するまで、時には皇帝カール五世(イスパニア王カールロス一世)やローマ教皇にまでインディオの保護を訴えつづけ、大西洋を数度航海した。彼は終生「世界のすべての人々は等しく自由と生存権をもつ」とことを主張し、「インディオの使徒」と

称えられた。

筆者がラス・カサスとイスパニアの対アメリカ植民政策(十六世紀)の研究を始めて早や十年近くになつた。ある人には筆者がラス・カサスにとりつかれていようように映るらしい。あるいはそうかも知れない。一体ラス・カサスの何処に魅力があるのだろうと、時々自問してみる。答えは出てこない。現在多くのラスカシスタ(ラス・カサス研究者)がいつているように彼が反植民地主義者だだけではない筈だ。しかし結局のところ莫然とした答えしか返つてこない。だからこそ研究しているのだと勝手に居直つたりする。ある人にならわるともラス・カサスについて研究することはないらしい。一九五四年チリで出版されたラス・カサス関係の書誌をひもといてみると、実にその年までに八〇〇に近いラス・カサスに関する作品や論文が発表されている。筆者は少くとも十九世紀末から今日に至るまでに出版されたラス・カサス関係の書物、論文には目を通した積りであるが、それでも疑問が残る。本当に最早ラス・カサスを研究する価値はないのだろうか、彼の思想や行動はすでに歴史的な意義を失なつてしまつたのだろうか、という疑問が。



L・ハンケ、S・ブール両教授とともに

こうした疑問を抱きながら本年八月二十六日、七ヵ月ぶりにメキシコ南端の州チャパラスの土を踏んだ。目的はラス・カサスが司教をつとめて

いたサン・クリストバル・デ・ラス・カサス市で開かれる第一回ラス・カサス研究者国際会議に参加することであつた。会議には、すでに前年筆者がコレヒオ・デ・メヒコに留学中に知り合つた現在アメリカ歴史学会会長のルイス・ハンケ氏(彼の「アリストテレスとアメリカ・インディア」は岩波新書で翻訳出版されている)、シルビオ・サバラ氏(メキシコ)、アンヘル・ロサダ氏(イス)、スタフォード・プール氏(アメリカ)、エルネスト・メヒア・サンチェス氏(ニカラグア)、トーマス・ハーマー氏(ドイツ)など世界各国の錚々たるラス・カサス研究者十八名が参加。さらにフランスからは名著「エラスムスとイスパニア」の著者で偉大なイスパニスタ、マルセル・バタイヨン氏が参加した。バタイヨン氏は八十二才とは思えない位若々しく、会議期間中、連夜遅くまで流暢なイスパニア語でラス・カサスについて語つて下さつた。彼は現在「エラスムスとイスパニア」の増補改訂の準備をされておられ、またハンケ氏、サバラ氏も七十才を越えてますます研究に熱が入ると仰有つているのを聞き、筆者はその凄まじいまでの探究心に頭が下がる思ひだつた。

筆者は会議の二日目に「一五四二年におけるバルトロメー・デ・ラス・カサス」と題する研究発表を行なひ、バタイヨン氏がその解説と批評をされた。発表後約三〇分の質疑応答があり、ハンケ、バタイヨン両氏の助けをかりて、何とか持時間の二時間の研究発表をおえた。三日目、四日目の会議も盛況のうち無事終了し、最後にサン・クリストバル・デ・ラス・カサス市にラス・カサス研究者国際会議事務局の設立案が満場一致で可決され、会議の幕をとりた。

その後、メキシコ市で聞かれた第四十一回ラテン・アメリカ研究者国際学会に参加し、「ラス・カサスの歴史的価値」という三〇分足らずの短い研究発表を行なつた。この学会は言語学、社会学、文化人類学、歴史学、民族学などいろいろな部会に分れており、世界各国から約三〇〇〇名の参加者があつたととき、筆者は歴史部会の「植民地主義とインディアニズモ」というシンポジウムに参加したが、ここではラス・カサスの思想の現代的な意義と、その思想をどのように実践すべきかについての激しい論争が行なわれた。これにはバタイヨン氏の愛弟子アンドレ・サン・ルーイ・レイモンド・マークス(フランス)、ピセンテ・ペレーニャ、カルメロ・サエンズ・デ・サンタ・マリア(スペイン)、エドムンド・オゴルマン(メキシコ)、ファン・フリーデ(コロンビア)等のラス・カサス研究者が参加し、互いに論文等の交換をした。

学会終了後、イペロアメリカ大学主催のメサ・レンドンダ(円卓会議)などに参加し、九月十九日ハンケ氏ら多くのラス・カサス研究者と再会を約してメキシコを後にした。多くの研究者と会つてつくづく感じたことはわれわれとの待遇の差であつた。

しかし現在なお多くの学者がラス・カサスの研究に携わつてゐることは逆説的であるにせよ、ラス・カサスの思想・行動が現代において大きな価値をもっているからだといえよういずれにせよ筆者は今後もこのラス・カサスという途轍もなく偉大な人物に真正面から取り組んでいくつもりである。

~~~~~

英知大学聖年巡礼団ローマへ

一九七五年は、カトリック教会において聖年と定められ、永遠の都ローマへの巡礼の旅が全世界の各地で計画されている。このたび、カトリック聖年行事日本委員会の主催、カトリック新聞社事業部と声社の共催のもとで、英知大学においても巡礼団が組織され、岸英司学長みずからが団長となつて、十二月二十一日より一月二日までの十三日間ローマへ巡礼する。この巡礼団は教皇パウロ六世司式の聖年式典、サン・ピエトロ大聖堂におけるクリスマス・ミサに与り、ローマを中心にヨーロッパ六カ国を訪問してヨーロッパ文化の魂にふれるよう阪急交通社によって企画されている。本学からは総務課長石田知一氏ら数名が参加、総数二十六名を数えている。

◆

松本武三神学生司祭職へ

昭和四十一年次に本学神学科に在籍していた松本武三神学生は、上智大学哲学科へ編入、同神学部を経て、十一月二十四日、姫路カトリック教会にて司祭に叙階された。叙階式には岸英司学長はじめ司祭教員、卒業生ら多数が列席した。

研究室便り

○岸英司学長(神学)は日本における代表的カトリック文化誌「世紀」十二月号特集「祈りと希望」に「祈り—未来を切り開くもの」と題して論文を寄稿し注目を集めている。同論文は東西宗教思想の広範な背景から、祈りのもつ目的性と創造性を論ずるといふ特異なもので、同学長の面目躍如たるものがある。

アメリカ、デューク大学神学部(プロテスタント)教授、R・H・ドランド博士は近著「ローダー・ブッタ」R・H・ドランド、Gautama the Buddha—An Essay in Religious Understanding, William B. Berdmans, Grand Rapids, 1974 の中で岸学長の英文著作「Spiritual Consciousness in Zen From A Thomistic Theological Point of View」をカトリックの神学解釈の代表としてあげるのみならず(二〇三頁)、その序文において、「二度にわたる、同学長を世界における代表的カトリック学者のうちに数え、また謝意を表わして」云々。

P13: Among the Roman Catholic theologians, both theologians and historians of religions, Louis Gardet, Kishi Hideshi, Louis Massignon, Joseph J. Speaand Robert Charles Zaehner.

P15: I wish also to mention gratefully as men by whom I have been greatly helped, the Japanese Roman Catholic scholar, Kishi Hideshi, now President of Eichi University in Amagasaki, and ... (このことは同学長にとりてのみならず、本学にとりても喜ばしいことである。

○大西忠雄教授

(フランス文学)は、去る二月、清水弘文堂刊行の「日本近代評論—比較文学講座Ⅳ」に「小泉八雲」についての論文を発表した。大西教授は、昭和四十五年六月にも、「へるん」という研究誌に「小泉八雲と仏教」と題するすぐれた論文をはじめ解説などを発表したことがあり、教授の研究について、比較文学学会やその筋の専門家たちから高い評価を受けている。さらにまた大西教授は、教育出版

センター刊行の「比較文学シリーズ」(欧米作家と日本近代文学)(全五巻)の第二篇(フランス篇)に「ゾラ」についての論文を執筆した。これは大西教授が長年にわたる深い研究にもとづき、昭和四十八年の夏季休暇をこつとくさいてまとめられた力作である。

○西山俊彦教授

(社会学・社会心理学)は、十月九日(十一日)に広島大学で開かれた日本心理学会第三十八回大会において、「宗教的パーソナリティの自我機制—Fスケールによる試み—」と題して研究発表を行いさらに同月十九、二十日、立命館大学で開かれた日本社会学会第四十七回大会において、前回に引き続き「宗教的パーソナリティ要因の比較研究(Ⅱ)—役割理論にもとづく社会性の視点より—」を研究発表して、各分野の研究者に大きな波紋を投げかけた。

なお、同教授が昭和四十七年六月に、京大心理学会より発行した論文「Cross-cultural Invariance of the California Psychological Inventory」は、海外で多くの識者の注目をひき、米國ブッケネル大学、カリフォルニア

ルニア・ステイツ・ポリテクニク大学、キャンサス州立大学、ミシガン州立大学、ボリリング・グリーン・オハイオ州立大学、ニューヨーク州立精神病理学研究所や、さらにソ連のカウナス医学研究所より問い合わせが殺倒している。

○井上博嗣助教授

(英米文学)は、三笠書房刊行の「ヘミングウェイ全集」月報第三号に「ヘミングウェイとスペイン」と題するアテイクルを執筆した。

○玉谷直実講師

(心理学)は十一月十日、奈良教育大学にて開かれた第八十六回関西心理学会において「強迫神経症の治療過程」と題して研究発表を行い、好評を博した。

○本多正昭兼任講師

(道徳教育の研究)は、九月二十五日、神奈川県川原戸塚市にある「聖母の園」で開かれた上智大学人間学会において、「身体性について—相即論理の立場より—」というテーマで研究発表を行い、多大の感銘を与えた。

創立記念式典にて

戸田助教講演

大学創立記念式典の一環として、戸田光章助教が「南ヨーロッパの国々」と題して、約一時間にわたり講演、多大の感銘をあたえた。同助教は、イスパニア文化の多様性について指摘したのち、リスボン大学やコインブラ大学などの制度や風習、ヘミングウェイとピオ・パローハとの交流、宣教師アレキサンドロ・ブレニアノの時代背景などについてきわめて興味深い解説をほどこし、南ヨーロッパの国々に対する聴衆の関心を呼びおこした。

海外派遣留学生渡辺喜代子さん

—二大陸をまたにかけて活躍—

本学より最初の留学生として、昨年十月カナダへ留学した渡辺喜代子さんは、マニトバ州、マニトバ大学、コレージュ・ド・サンボニファ

スにて一年間の研鑽を終え、同大学の教授の推薦により本年九月からパリのカトリック学院で勉学に励むことになった。「ぜひとも海外に本学姉妹校を」という長年の念願は、昭和四十七年八月、岸英司学長が欧米、カナダの各地をまわり、諸大学の学長に会って交渉した努力が実を結ぶことになって達成され、フランス文学科より渡辺さんが志願、外国語のテストに見事に合格して、本学より最初の海外留学生として、コレージュ・ド・サンボニファスに迎え入れられることになったのである。

渡辺さんは、同大学で、カトリック司祭や修道女たちによって構成されている教授のあたたかい指導のもとによく勉学に励み、事情にもかかわらず通じるようになり、有意義な学生生活を送っていた。渡辺さんの指導にあたっていた、同大学のロビド神父は、彼女のすばらしい成績と人物を高く評価して、フランス語およびフランス文学の研究を深めるために、パリのカトリック学院とアリアンソ・フランセで学ぶよう渡辺さんを推薦してくれた。そのための入学テストなどの善意に支えられ感激にひたりながら、渡辺さんは今熱心に勉学に励んでいる。

渡辺さんはつぎのように近況を伝えている。

『カナダでフランスの学生ビザを得た後、モントリオール、ケベックを旅行し、九月十三日の朝パリに着きました。カナダを離れる時はやはり悲しくて少し泣いてしまいました。カナダではロビド神父様、シスター・ロレンヌをはじめ色々な人々にお世話になりました。約一年間、楽しい学生生活を送りましたのも岸学長、井上神父様、皆様のお蔭だと感謝しております。パリでは毎日 Institut Catholique の Alliance Francaise の講義を受けています。二校ともとても良い内容だと思えます。学生はスイス人が一番多く、次にイタリア人、スペイン人、英国人、日本人の様です。外人女学生の多くはフランス人の家族にお手伝さんのような形で住み込み、学校に通って生活しています。私はカナダのシスターに紹介していただいた修道院の中にあるフランス人の女学生のための寄宿舎に居ます。シスターたちが私たちの世話を下さり、とても住み安いです。

先週の日曜日、学校で実施されている遠足に参加しました。ロワール川の辺にあるお城巡りで、フランスは今一番美しい時で、自然の成せる業に改めて驚嘆しました。』

英知通信

昭和四十九年十二月十五日発行  
編集者 英知大学  
発行者 学長広報室

兵庫県尼崎市若王寺苗田  
一〇〇の  
一五〇八三  
電話(06)四九一一  
六六一